

7 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2017 in Minamishinsyu

テーマ「ネットワーク強化による産業振興」

(敬称略)

コーディネーター	公益財団法人南信州・飯田産業センター	航空宇宙プロジェクトマネージャー	松島 信雄
報告者	飯田市	産業経済部長	高田 修
行政	豊川市	市長	山脇 実
行政	田原市	市長	山下 政良
行政	大鹿村	村長	柳島 貞康
経済	飯田商工会議所	会頭	柴田 忠昭
経済	豊川商工会議所	会頭	小野 喜明
経済	新城市商工会	会長	本多 克弘
経済	飯島町商工会	会長	下平 陸昭
経済	阿智村商工会	会長	藤倉 陽太郎
住民	サンガラトナ	代表	大島 たまよ
住民	奥三河自然と歴史にふれあう会	代表	加藤 博俊

■はじめに

コーディネーター／公益財団法人南信州・飯田産業センター
松島航空宇宙プロジェクトマネージャー



本日は、豊川市の山脇市長、飯田商工会議所の柴田会頭をはじめ、皆様に御参加いただきまして、このディスカッションができます

ことを、大変光栄に思っております。

本日の進行ですが、事務局からまず前回の議論のおさらいと、今回のテーマについて説明をいただきます。次に飯田市産業経済部の高田修部長から地域産業のプラットフォームを目指してと題しまして、御報告をいただきます。そして、その後、御出席の皆様からの御意見を承りながら、論議を進めていければと思っております。それでは、最初に前回の三遠南信サミットでの、「技」の分科会で行われました論議について、おさらいをしていただきたいと思います。

事務局

それでは、前回の三遠南信サミット「技」分科会での議論について、おさらいをさせていただきます。

前回の「技」分科会では、各地域には地域資源を活用した特色ある産業が存在しており、そういった地域産業の特色を生かした地域ブランドの育成や、販路開拓に向けた取り組みや、こうした活動を三遠南信地域全体で支援するための取り組み、特にそれを支える人材育成について、議論をいたしました。まとめると以下の3点となります。

1点目が、三遠南信地域創生を図るため、地域内に雇用を創出し、新たな人の流れをつくることが求められる。

2点目、雇用を創出し、新たな人の流れをつくるためには、それぞれの地域が有する、特徴ある産業や歴史、文化、風土に根ざした魅力ある地域資源を活用し、三遠南信地域内での連携、例えばマッチング、独自産業化、産業の集積などにより、新たな価値を加えた産業、商品、サービスに発展させていくことが有効です。

3点目、あわせてこれら新産業、商品、サービスを創出するための人材育成及び、その確保が極めて重要であり、引き続き三遠南信地域内の大学、行政、企業、市民団体が連携しながら仕組みづくりを進めていく。

ただいま申し上げましたことを踏まえ、今回の議論のテーマにつきまして、御説明をさせていただきます。

経済活動のグローバル化が進む中で、県境を越えた地域のネットワークを生かした産業競争力の強化を図り、三遠南信自動車道など、交通ネットワーク整備の効果を最大限に活用するための産業振興の方策を議論するため、ネットワーク強化による産業振興を今回のテーマとさせていただきます。

コーディネーター

それでは、次に、地域産業のプラットホームを目指してと題しまして、飯田市産業経済部の高田修部長から御報告いただきます。よろしく願いいたします。

■報告

飯田市 高田産業経済部長

本日のテーマが、ネットワークの強化による産業振興でございますので、飯田市産業経済部の立場とともに、この地域の公益財団法人南信州飯田産業センター、あるいは広域連合等、少し広域的な取り組みも含めて、現在取り組んでいることの御報告をさせていただきますので、よろしく願いいたします。

資料集の22ページからになっておりますが、最初のコマはこの地域の特色ある産業、あるいは製品がありますけど、早速その次のコマからいきたいと思います。

資料集の23ページ下段になります。

初めに、この地域の少し広域的な取り組みの状況から見ていただきたいと思います。

この地域は、飯田市と下伊那郡13町村で、平成21年に定住自立圏の協定を結び、南信州定住自立圏を形成しています。飯田市と下伊那郡は、ともに生活圈、経済圏が一緒ですので、古くから一緒に行政も広域連携に取り組んできています。昭和44年から広域市町村協議会を設立しておりますし、その後常備消防や特別養護老人ホームあるいはごみ処理という形で、一部事務組合を経て、平成11年に南信州広域連合という形で、広域行政を進めてきています。ここに、左上には、医療、救急医療の関係で、どのような取り組みをしているか。それから、右側が産業センターですが、この産業振興の部分について、次のコマで見ていただきたいと思います。

この地域では、飯田市と下伊那郡内の町村、長野県、それからこの地域内の企業あるいは、業界団体の皆様の出資で昭和58年にその当時の名称でいきますと、飯伊地域地場産業振興センターという法人が設立をされています。この法人は、この地域、市町村の枠を超えて、産業振興を図るための法人として設立をして、その拠点となる産業センターが、昭和59年に

完成をしています。それぞれ、市町村の負担だけではなく、国、県の支援、それから地域内の企業の皆様にも御出資をいただいて、この施設もつくられています。

昭和58年当時からこの地域は一市町村ではなくて、広域的に産業振興、特に地場産業や製造業の分野で一緒に取り組むという風土がずっと育ってきている地域です。この中の、産業センターの取り組みとして、特に最近注目を集めておりますのが、航空機に関する部分です。この地域は精密機械をはじめとした産業が盛んであったわけですが、どうしても中小の下請け型という形でした。そういう中でグローバル化、あるいは生産拠点の海外シフトという形で、どんどん付加価値が下がっている状況の中で、この地域の製造業をどうしようかということがありました。その中で2006年に飯田航空宇宙プロジェクト、あるいは飯田産業技術大学がスタートすることになります。それは、ねらいとすれば二つあります。一つは、航空機分野を目指して地域内の企業が協力をするという地域内の製造業、特に精密機械の関係企業が協力する風土をつくらうというのが、この真中です。

それから、この地域には高等教育機関がありませんので、技術者にそういった場所を提供しようということで、飯田産業技術大学が2006年にスタートをしております。

なぜ航空機かということですが、この地域は非常に精密機械が強い分野でありました。それから、特に航空機産業は、その当時から成長が注目をされておりましたので、その分野に取り組んでみようとなりました。また、この地域は航空機産業の中心である中京圏に近いというメリットがあります。それからもう一つは、この地域に多摩川精機株式会社というリードしていただける会社があることです。いろいろな要件の中で、航空機産業を選択して、航空宇宙プロジェクトがスタートしたのが2006年でした。それ以来ずっと取り組んで

きているわけですが、この地域は部品加工の分野が強い一方で、それをユニットとしてつくり上げるにはこの地域の中でできない部分がありました。それを、地域の中で一貫生産できるようにしようということで、この航空宇宙産業クラスター拠点工場を産業センターが借入をし、国や県の支援を受けて建設をしました。この工場が整備されたことによって、熱処理や表面処理、非破壊検査という、それまでできなかった部分も含めて、この地域の中で航空機の部品にかかわる一貫生産をする体制が、ようやく整ってきたという状況です。

次に、この航空機以外の部分ですが、この地域にはその精密機械以外にも伝統的に食品、お菓子類の食品、あるいは味噌、醤油などの発酵の分野、あるいは、高野豆腐という食品系に非常に強い企業があります。

今申しました機械工業もありますが、そうした企業の皆様が健康長寿社会に貢献をしようと、企業の枠を超えてネットワークをつかったのが飯田メディカルバイオクラスターです。目的は、健康長寿社会を支える新しい産業を作り出すことです。

それを目指すために、二つの分科会をつくっています。一つは、医療機器系分科会、もう一つは食品系分科会で、現在それぞれに取り組みをしております。医療機器系分科会では、例えば市立病院の医療機器は大変ですが、その周辺機器で何か困っている部分はないか、それをこの地域で何かできるものはないのか、という研究をしています。

それから、食品系では、この地域内の食品の皆様が一緒になって、介護食品やのどに詰まらないような嚥下食品などについて地域の食材を使った食品ができないかという研究をできるだけ実用化に向けて取り組んでいます。産業界、医療機関、あるいは飯田女子短期大学などのいろいろな機関、団体がメディカルバイオクラスターというネットワークを組織して、取り組みをしているところです。

そういう中でこの地域、平成24年だったと思いますが、リニア中央新幹線のルートが決定、それから長野県駅の場所もおおむねわかってきました。この地域として三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という高速交通網が整備される時代が、十数年後にはやってくるわけですが、この地域をどうしていったらいいのかが課題となってきました。

そういう中で、産業振興の方向を考えたときにこれからの産業センターの役割は何だろうかということ、4点整理してあります。

1点目が、技術の高度化、新たな分野へ挑戦を支援する研究開発機能です。2点目が、企業の研究開発を支援する公的試験場としての試験検査機能です。3点目が高い技術力を持つ人材を育成する機能です。4点目が、インキュベーターや情報発信等によって異業種連携や起業家の育成という部分をこれからしっかりやっていくことによって、この地域のものづくりの高度化、付加価値を高めようじゃないかということで、産業センターの役割を確認したときに、現在の場所では少し手狭であり、老朽化が目立つという課題がありました。

もう一つの視点ですが、旧飯田工業高校というものがあります。これは、リニア中央新幹線の長野県駅の予定地から1キロメートルほどのところにあるのですが、県立高校の統合によって、この高校が廃校になりました。広い敷地、頑丈な建物でございますので、何とか地域で産業振興や人材育成に使えないだろうか検討が始まったのも同じころです。

その中で、この工業高校の建物の利活用の一つの方策として、産業センターの機能をそっくりここへ移すことはできないだろうかとなってきたわけです。ただ、これは県の施設でございますので、それを私どもの地域で使わせていただくためにはどうしても県の支援が必要ですし、これだけの施設を改修するにはどうしても費用がかかりますので、国からの支援もぜひ引き入れたいと考えてまいりまし

た。その中で、現在注目されている航空機産業をリード役にして、国、県と連携できないだろうか考えるに至りました。

先ほども申しましたように、目的の一つは産業センターの機能を高めていきたいということですが、その中でも国等から注目されておりましたのは、この地域の航空機産業にかかわる取り組みについてです。地域から見れば航空機の部品製造という部分から、もう少し付加価値を高めていくためには、航空機システム装備品分野へ挑戦をすることが大事だということで、そのためには、二つの柱が必要です。

一つ目の柱は、人材育成のために大学の力を呼び込むこと、それからもう一つの柱は、公的試験場としてしっかりと試験評価ができる機能を持つ必要があるということです。この公的試験場の機能部分をこの旧飯田工業高校の施設を活用する目玉にできないだろうかということで、国や県と相談させていただきました。そういう中で、先ほどの旧飯田工業高校の施設を県から譲り受けて、この地域で航空機産業を進めていくための核をつくっていかうということがようやく県と話が進んでまいりまして、長野県には航空機産業振興ビジョンをつくっていただいて、しっかり支援をいただけることになりました。

それから、先ほどの旧飯田工業高校施設の改修につきましても、国の地方創生交付金を14市町村、この地域全部の市町村が共同で手を挙げて申請をし、交付金を受け、現在改修工事に入ったところ。そういう形で拠点をこれからつくっていかうということです。

それからもうひとつ、信州大学の力をお借りして、航空機システム共同研究講座という信州大学工学部の新たな大学院生を養成するための講座を、この旧飯田工業高校でやっていただけることになりました。当面は寄附講座という形で、地域内の企業、行政、それから金融機関がそれぞれお金を出し合って、こ

の信州大学の講座設置をお願いして、資金は地域でつくるから、ぜひ講座をこの地でやってほしいということで、信州大学と話がまとまって、本年の4月からこの講座はスタートいたします。

この信州大学の講座の専任教授として、ここに名前はありますが、昨年の春、JAXAを退官された工学博士の柳原先生を、この講座の専任教授としてこの地にお迎えすることができて、この4月から航空機システムにかかわる大学院生の養成が始まります。

航空宇宙システム研究センターとありますが、ここは地域と信州大学の教授の皆様と一緒にあって、研究開発を進めるためのセンターという機関を信州大学の中につくっていただいて、大学と地域企業のネットワーク構築も進みつつあるという状況であります。

旧飯田工業高校の施設を使いたい、改修したい、それを県から譲ってほしいということのために、航空機産業が前面に出ておりますが、産業センターの役割として重要なことは、地域にある資源を使った様々な産業をしっかり高度化し、付加価値をつけていくことだと思っています。そのための拠点づくりとして、航空機産業を前面に出して外からの支援も受けながら、この地域全体の技術力を高める、あるいは産業の高度化を図っていく、付加価値を高めていくことを取り組んでいきたいと拠点づくりに頑張っている状況であります。



■意見交換

コーディネーター

高田部長から飯田市の産業振興、特に新しい「知」の拠点構想を中心に御説明いただきました。

それでは、意見交換の時間に移らせていただきます。

まず、最初の設問であります。地域内の連携によって現在取り組んでいらっしゃる産業振興策について最初に御紹介をいただければと思います。

最初に日本で最も美しい村連合の大鹿村の柳島村長からお願いいたします。

大鹿村 柳島村長

最初に御指名をいただきましたので、光栄と思いつつ、この「技」分科会のお話に合うかどうかわからなくなってしまった私の原稿を読ませていただきますが、よろしくお願いたします。

大鹿村は、これまでは、三遠南信地域の一番北側だとお話ししていたのですが、駒ヶ根市などが加入されましたので、ちょっと横にそれたのかと思っています。大鹿村は山間地であり、村の中心を中央構造線が通って、非常に土質等が脆弱なところで、災害は非常に多く、結構昔から、国の直轄の砂防事業などが入っている村です。

現在は、人口1,000人ほどですが、村の産業は、約半世紀前ぐらい前まで夏場は稲作と養蚕、冬場は炭焼きで生計を立てて住民は生活していました。ただ、燃料の変化によって冬場の仕事が変わってきました。先ほど言いましたように、脆弱な地質のために、土木事業が盛んにありましたので、夏場は農業で頑張り、冬場はそういうところに出て、収入を得るということで村の人口も減りつつではありましたが、2,000人程度を維持してきました。しかしながら、最近は、そういうやり方が

通用しなくなってきました。まず、農業での所得が得にくくなってきました。それから、臨時的な建設業や山の仕事等の冬場に現金収入を得ていたその仕事が、ちゃんとした教育を受け、通年雇用でないという仕事にも携われないという厳しい状況になってきました。仕事がなく、収入が得られないために村を離れる人たちが多くなってきていると、私は思っております。

現在、大鹿村が一生懸命取り組んでいるのは、農業を目指すIターン者の転入です。先ほど日本で最も美しい村連合といわれましたが、私の家の周りも大変な耕作放棄地があったのですが、これをIターン者5名ほどが耕作してくれており、最近見えなくなりました。

そういう方たちが作る農産物を加工等するための施設をつくりながら、また、製品のブランド化を目指し、認定ルールや、ゆるキャラのシールを作成し、今後も村のPR、販売につなげていくという、本当にささやかですが、村にとっては重要なことに取り組んでおります。

コーディネーター

次に阿智村商工会の藤倉会長、よろしくお願ひいたします。

阿智村商工会 藤倉会長

まず、最初に高田部長のお話がございましたが、実は、私の本職も精密関係であり、この航空産業にお手伝いをさせていただいているところでございます。阿智村から多摩川精機株式会社への納品のために、たまにですけれども、阿智村からお邪魔をしている状態です。しかしながら、何と言っても阿智村は観光地としての取組みを進めていただいているところでございます。大鹿村の柳島村長ではありませんが、ちょっと論点とずれるかもしれませんが、御了解をいただきたいと思ひます。

三遠南信自動車道の開通によりまして、圏域間の移動時間がやはり短縮されますので、南信地域に企業誘致の施策を充実させ、企業におけるコストの低減を図るとともに、地元の雇用の増進を図りたいと考えております。また、販路の開拓にも期待されるところでございますので、あと9年後といわずに、もう少し早くに開通ができればいいと思っております。

コーディネーター

阿智村は、観光面でも「日本一星空の美しい村」ということで、今、大変人気を集めていると思ひます。

次に、サンガラトナの大島様、お願ひします。

サンガラトナ 大島代表

私の活動は、伝統文化や衣食住にまつわる手仕事の技から、最先端の再生可能エネルギーの活用というところまで手掛けております。自分のコンセプトとして、伝統と未来の融和、経済と環境の融合というところで、キーワードは、持続可能な社会の構築を目指しております。

具体的に再生可能エネルギーの活用というところで申しますと、今、茶畑のソーラーシェアリングを天竜区で行う準備をしております。ソーラーシェアリングとは、畑をつぶさずになおかつ、畑の生産力をアップさせ、しかも、農家の手間を軽減でき、さらには、農家の収入増を図るという取組みです。農家の収入が上がらなければ、農業に根ざす若者という人口も増えないですし、またそのソーラーシェアリングをする茶畑に関しまして、百古里地区というところなので、百古里めぐりという地区の活性化を図る事業も手掛けております。

地域が元気になることが第一で、その先に移住、定住があると考えており、行政の整え

る諸条件も大変重要だと思うのですが、どのような町、地域に人が住みたいと思うかということをお前提に考え、そういう町の活性化の事業も手伝わせていただいております。

また、生産品に関しましても、私はお茶の事業を手掛けているのですが、日本の茶葉は欧州で大変評価が低いということで、その理由が、農薬が欧州基準に引っ掛かっているということなのです。その国際基準に合う茶葉の生産にも引き続き取り組んでいきたいと思っております。

コーディネーター

ありがとうございました。

続いて、三遠南信地域の産業振興、それから産業競争力の強化を図る上で、先ほどまではそれぞれの地域内の連携を主体でお話をいただきましたが、今度は圏域内での連携に取り組むことによって、さらに効果が期待できる点を中心にして、御紹介をいただければと思います。

最初に豊川商工会議所の小野会頭からお願いいたします。

豊川商工会議所 小野会頭

まず、本日は三遠南信サミットということで、トップの方がお集まりで、お話があるのですが、産業振興は基本的には民間の仕事でありまして、行政や政府がどのようにかかわるかということに、私は大変疑問を持っております。やはり、製造業でも何でもいいのですが、想像力、開発研究などアイデアをいかに醸成させるかが大事であり、これは日本の補助金行政や経済産業省の政策で致し方がないところはあると思うのですが、民間に任せるところは、どんどん民間に任せていかないとなかなか進みません。

もう一つの方法は、大学研究機関からのいわゆるスピアウト、もしくは共同研究でありまして、大学研究機関をこの地域に誘致、

また新しく産業に結び付けることはなかなか難しい。東三河でも豊橋技術科学大学の有効活用、先ほども大貝副学長が言っていましたが、現実の姿として地域との産学連携はできてないことが問題になっていきますので、非常に難しいのです。

やはり、産業強化というのであれば、インフラが一番大事ではないかと思えます。全体会のトークセッションにおいて、かつては鉄道が唯一の道だったという飯田女子短期大学の高松学長のお話もありましたが、今後は道路、さらには空港の誘致が非常に必要ではないかと考えております。浜松市には航空自衛隊の基地があるのですが、これからMRJ等が行き来できるような、ハブのその先の空港をこの地域に持ってこない、アクセスという点では、いわゆるグローバルに戦おうとする企業にとっては航空機のアクセスは必要になるのだらうと思えます。

そういう意味で、三遠南信自動車道は、その先にある、航空機、空港を目指していくアクセスとして非常に重要ではないかと思えます。

それからもう一つは、日本の今の産業界の状況を踏まえた上での、施策を考えなければいけないということでありまして、グローバル展開の中で海外進出をして、企業がどんどんなくなるという中で、衣食住に関するような国内に目を向けた産業の振興が私は大事じゃないかと思えます。むしろ、住や食、住みやすさに関連する医療などについての集積を考えていくことが、長期的には非常にあり得るのだらうと考えております。人口が、2050年、60年で8,000万人、7,000万人になるという報告もありますので、やはり国内重視、国内での付加価値を高めるべきではないかと思えます。

それ以外のグローバル競争にいかにかこの行政や商工会議所がかかわって、一民間企業にグローバル競争に勝つような施策があり得

るのかどうかという点が、私は非常に疑問です。私自身が一企業として海外でやっている中でそのような感想を申し上げました。

コーディネーター

引き続き奥三河自然と歴史に触れ合う会の加藤代表からよろしく願いいたします。

奥三河自然と歴史にふれあう会 加藤代表

私は、設楽町からやってきました。午前中は、三遠南信住民ネットワーク協議会の住民セッションにおいて、いろいろな情報や意見を交換してまいりました。

今回は、地域間の連携についての発言ということで、それに結びつくか、ちょっと難しいところもありますが、三遠南信圏という大きなくりで考えますと、発展をしているところも多々ありますが、実は発展していない場所のほうがずいぶん多いと思います。設楽町は、残念ながら発展していない場所に当たりますが、何とか頑張ろうという意識は住民にも高まりまして、観光産業について、2点ほど重点的に報告したいと思います。

一つは、圏域内の連携によって、互いの長所、短所を情報交換することで、人と人、物と物がつながり、循環することに取り組むことを続けてきました。最近では、わずかではありますが、若い人たちが都会から移り住んで定住するようになってきました。その若い方たちは、本当に自分たちで自立をする力を持っている人たちが移住してきます。我々は何らかの形で、できるところは応援したいと思っています。

二つ目は、地域に合った食物を生かす特産品の開発です。食と風土を感じられる、うまい、気持ちがいい、独特の気分が味わえる、そういった食と場所をつくり上げることで、地域の産物やまた都会では味わえないものをつくり上げ、地域で暮らす仕組みをつくり上

げることで、過疎・少子化を緩やかに、都市中心型も緩和できるように臨んでおります。

当地域には段戸高原というところがあります。標高が900メートルくらいあるのですが、ここの環境は北海道の札幌や、軽井沢と非常によく似ております。地域の人たちがこの地域でとれるメープルシロップの生産、段戸牛の放牧を行っているほか、設楽町が高原内の原生林にビジターセンターなどをつくって、役場と地域住民が連携を取りながら、活動する「軽井沢構想」などに取り組んでおります。

コーディネーター

引き続きまして、飯島町商工会の下平会長、よろしく願いします。

飯島町商工会 下平会長

私も長い間、飯島町に住んでおりまして、東京から飯島町へ移住してきておりますが、その中で昭和47、8年頃、中央自動車道がようやく開通するかしないかという時期でありまして、名古屋方面から少しずつできてきて、その後飯島町を含むこの上伊那、下伊那の伊那谷と呼ばれるところは、すごい変化を遂げてきたわけです。

これが、三遠南信自動車道ができることによって、今度は、遠州、東三河地域の関係の仕事が我々のところにどっと入ってきてくれたらいいという思いでいるところですが、いずれにしてもこの三河、遠州地域で企業がどういう仕事をやっていて、どういうことがマッチングできるかということが、最大の課題になるのではないかと私は思っております。それさえできれば、大きく変わってくるのではないかと考えています。

中央自動車道ができて大きく変わり、三遠南信自動車道ができて大きく変わる、大きな転換期に来ていると思いますので、我々もそれに向かって、しっかりと準備をしていかなければいけないと考えています。

また、それぞれの商工会、企業、あるいは公共団体等において、いかに自分のまちが住みよいまちであるかを PR しながらやっている現状の中で、一番大きく影響してきているのが、地域おこし協力隊というシステムです。飯島町には13人の方が来てくれて、これは3年間の活動期間なのですが、2年の活動を経て企業を興す方も出てきました。少しでもまちに活気が取り戻す最大に考えながらやってきましたので、これから先が非常に楽しみだと思っています。

コーディネーター

引き続きまして、新城市商工会の本多会長、よろしくお願いいたします。

新城市商工会 本多会長

私は、まずもって新東名高速道路の新城インターチェンジができたおかげで、新城市は放っておいてもよくなると以前から言っていたのです。奥三河自然と歴史にふれあう会の加藤さんのお話にもあったように、もうインターチェンジからものの10分、20分でエアコンの必要ないところがいっぱいあるわけですから、日本のど真ん中、東京まで2時間ちょっと、大阪まで2時間ぐらいです。

私も製造業をやっていますので、自分の会社を例にとってお話ししますが、Uターン組が増えてきています。実家に帰ると立派な家があり、大学を出してくれたのだけど、いい人は就職口がなかったから、昔は学校の先生になったのですね。先生が公務員で、働き場がないものだから、教育レベルが非常に高い。だから、そういうことがわかってきて、本当にUターン組がふえてきたのがありがたいと思います。

環境によって、ものすごく変わることがあるわけで、先ほどの高田産業経済部長の話は大変いい話で、リニア中央新幹線の効果は大変なものがあると思いますし、今、政府が地

域再生と言っていますが、まさしく飯田市などに大きく投資するべきだと思います。先ほども、空港の話もありました。地理的な条件はあるわけですが、これから空の時代が絶対来るわけですから、タイムディスタンス、時間、距離、何キロありますかではなくて、何時間、何分で行けますかという時代になってくると思います。そういう意味で、私はこの三遠南信地域は、別に悲観することはないし、今後ヘリコプターの時代どころか、飛行機の時代がきて、一遍に10人、20人が移動できる時代が来るわけですから、決して悲観することはないし、私はこの場を借りて、政府に飯田市のような可能性のあるところにどんどん投資し、そういうところがリーダーシップをとって産業振興し、いろいろな産業が生まれ、モデルとなるまちとなってほしいと思います。

私は、まちおこしは市長で決まるとつくづく思っています。本日、豊川市と田原市の両市長がお見えですが、2人とも一生懸命トップセールスをやっています。

田原市の山下市長や豊川市の山脇市長のようにトップセールスが必要だということは、本当に学ぶ点が多いと思います。

飯田市のように可能性のあり、いろいろな希望を持つことができ、しかも、環境がいいという点は、本当にうらやましく思います。奥三河から、新野峠を越えただけでもう空気が違い、山の緑の色が違うのです。これは、セールス産業にうってつけの場所だと思います。諏訪周辺が精密産業の中心という時代がありましたが、こんなに環境のいい場所ということに加え、リニア中央新幹線が開通すれば東京まで20分かそこらで行くわけですから、私も本当は、営業所などを移したくなるほどいい場所だと思います。私は、本当に可能性のある地域に国は投資すべきだという運動を起こすべきだと思います。

豊橋市で牧野市長の講演を聞いたこともあります、大変トップセールスがすばらし

い市長だと僕は思い、楽しみにしております。私は、ぜひ、この地域を引っ張るリーダーシップを発揮し、モデル都市になってほしいと期待をしています。

コーディネーター

まずはそれぞれの地域の良さを生かしながら、人、情報、ものの交流について、交通インフラの整備が大きく時代を変えていくというお話ではなかったかと思えます。

そういう面では、それぞれの地域が特徴を生かして、ぜひ先端を走っていただければと思います。

まだ、三遠南信自動車道は完成していませんが、南信地域においては、精密加工業が集積しており、東三河、あるいは遠州地域の自動車産業等との交流が高まっております。そういったことも私からも情報をつけ加えさせていただきたいと思えます。

特に豊橋市、湖西市、それから浜松市、磐田市で開催して下さっている展示会には、多くの皆様に参加していただいて、かなり活発な技術交流が始まっております。こういうことをさらに促進するためにも、三遠南信自動車道の開通が待たれるのではないかと思います。

次に3番目の課題として、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線をはじめ、地域内で計画されている交通ネットワークの整備が各地域内の産業振興に及ぼす効果を高めるために、さらに取り組むべき課題を中心にして、残りのお三方に御意見をいただければと思います。

最初に豊川市の山脇市長からよろしくお願ひします。

豊川市 山脇市長

実は私ごとになりますが、南信州地域にピュアホワイトというトウモロコシがありまして、これを4年ほど前に食べたら本当においしかったのです。生で食べられるという点も初

めの経験でして、こんなすばらしい食べ物があるから、毎年7月下旬から8月上旬にかけて来るのです。やはり豊川から来ますと、中央自動車道を経由しても2時間、国道151号を通っても2時間以上と大変時間がかかりますが、時間がかかっても食べに来たいと思えます。それで、このトウモロコシがこんなにおいしいということをほかの地域で知らない人が多いのではないかと思いますので、この地域に来る人を増やすために、やはりそれぞれの宣伝をしっかりといただければと思います。

豊川市は、バラの生産量では日本一を誇っており、今PRを強化しているわけですが、それぞれの地域のすばらしい財産をお互いに大いに宣伝して、販路を広げることが大事だと思います。

田原市で収穫できたサツマイモを飯田市の酒造会社で焼酎としてつくってもらった亀若の事例もあります。まずは農のほうで、自分のところ、おらが町のすばらしいものをお互いに宣伝して、これから使えるようになったらよいのではないかと考えております。

そして、そういったものをつなぐには、やはり交通インフラが大変重要だと思っております。豊川市でいいますと、国道151号が南北軸を支える重要なルートだと思っております。こちらのインフラ整備についても三遠南信自動車道とともにしっかりと進めていただきたいと思いますし、我々もしっかりと要望していきたいと思っております。

それと、南信州地域はリニア中央新幹線が開通予定ですが、豊橋駅に停車する東海道新幹線のひかりは2時間に1本しかありません。浜松駅に停車するものも1時間に1本です。これをもっと増便していただければ、東京や大阪への所要時間も大変短くなりますし、交流機会がたくさんできると思えますので、しっかりと進めていっていただきたいと思います。この点については JR 東海にお願いすること

になりますが、この地域の発展のためには、インフラ整備は大変重要な課題だと認識をしております。

これからも皆様方と、この三遠南信地域で一緒になって頑張ってもらいたいと思っております。

コーディネーター

引き続き田原市の山下市長、よろしくお願いたします。

田原市 山下市長

何と云っても、道路インフラの必要性を痛感しております。渥美半島ほぼ全域が田原市になっておりまして、現状では東名高速道路の最寄りのインターチェンジまで1時間以上という地理的なハンディを負っておりまして、それは産業面においても大変大きな課題となっております。交通ネットワークなどのインフラの整備が充実できれば、製品、それから生産物などの物流や日常生活での交通面においても利便性が格段に向上するなど、直接的な面での課題は十分に解決されるものと思っております。

一方でインフラが整備されれば、地域外からの流入人口の増加が見込まれますので、いかに効果的にもてなすかが本市の課題と考えております。せっかく訪れた観光地が期待外れであったり、また食や文化、レジャーが期待にこたえられなかったりしては、リピーターも増えませんので、そんなことが起こらないよう、昨年度から田原市の地域ブランドづくりに取り組んでおります。

その中の一つが今、山脇市長も言っていたきましたし、先ほどのトークセッションの飯田信用金庫の森山理事長もおっしゃっていただきました。

田原市でつくった芋を、飯田市の喜久水酒造に持って行きまして、芋焼酎の亀若をつくっております。これも田原のブランドとして、

大変好評をいただいているところです。地域資源や特性を生かしたすぐれた商品やサービスを渥美半島田原ブランドとして認定することで、地域経済の発展や田原市の知名度の向上、そして田原市を訪れる人を満足させるための取り組みとして開始をいたしております。

認定品といたしましては、特産品のメロンを初めとした肉や魚、加工品など78品目を認定しております。

また、各景勝地の駐車場や施設の改修なども計画しておりまして、ソフトとハードの両面からおもてなしの取り組みを進めることが必要であって、これがまた課題でもあると感じています。

コーディネーター

それでは、一通りという面では、最後になりますけども、飯田商工会議所の柴田会長よろしくお願いたします。

飯田商工会議所 柴田会長

テーマは、交通ネットワークの整備がこの地域内の産業振興に及ぼす効果を高めるためにどんな課題が必要かということですが、交通インフラの整備をちょっと整理してみたいのですが、二大プロジェクトであるリニア中央新幹線と三遠南信自動車道は、もう皆様御案内のとおりですが、リニア中央新幹線関連につきましては、国道153号の整備、それから中央自動車道座光寺パーキングエリアにスマートインターチェンジを併設し、そのスマートインターチェンジからリニア中央新幹線長野県駅までのアクセス道路の整備が大きな交通インフラの目玉になって、これはもう着々と進んでおります。

先ほどのトークセッションでもお話がありました。リニア中央新幹線は人と情報を運び、それから、道路は人と物を運ぶということで、その開通した後の相乗効果は計り知れないものがあります。

それに向けて、まず、一つ目の結論といいますと、この地域の特色や強みを生かした産業づくりということを考えていく必要があるのではないのでしょうか。その大きな流れについては、先ほど飯田市の高田産業経済部長のお話にありましたとおり、航空宇宙産業、それから、メディカルバイオクラスターなどといったものを伸ばしていくことが非常に大切な方向性の一つだと思っております。

それから、二つ目には、産業競争力を高めるための戦略的な企業の誘致、先ほど新城市商工会の本多会長が本社などを移したいという話がありましたが、戦略的な企業の誘致、それから地域の連携による産業振興ということが非常に大切になるのではないかと、思っております。全体会のトークセッションに参加をされた方もたくさんいらっしゃいますが、そこでは、パネラーの方々がそれぞれ別々の切り口で、いろいろお話をされました。

その中では、この飯田の地域には魅力もなく、さみしいところで、リニア中央新幹線が開通すると、地域外へみんな吸い取られてしまうのではないかと心配する御意見とともに、この地域が非常に魅力的な地域の場所になるので、その魅力を生かして、この地域の発展を目指そうという御意見もありました。大変心強いお話でありましたので、この地域の産業振興の効果を高めるために、もう一度繰り返しになりますけども、この地域の強みを生かした産業づくり、産業競争力を高めるための戦略的な企業誘致、地域連携、こういうことが非常に必要だと考えております。

コーディネーター

皆様から貴重な御意見をいただきました。本日のテーマである、ネットワーク強化による産業振興について、それぞれ、すばらしい地域のよさ、あるいは取り組みをしていらっしゃることをお話しいただきました。それを

リニア中央新幹線、あるいは三遠南信自動車道の開通促進、さらに関連するインフラの整備、こういうことを含めてどうネットワークを強化するかという連携ですね。この辺が残された大きな課題ではないのかなと感じております。

そういう面で、一時期、浜松商工会議所が中心になって進めてくださった三遠南信クラスター推進会議という国の委託事業がございました。その中で、次世代の産業振興を図ろうということで、次世代輸送用機器、それから2番目が光・電気・電子産業、3番目が健康医療産業、4番目が新農業、それから5番目が航空宇宙産業、こういう五つのテーマをもって、数年間一緒に連携事業として進めていた時期がございました。これから、三遠南信自動車道とリニア中央新幹線という二つの主要幹線が整備されるについて、先ほど高田部長からも説明がありました機能拠点という構想も飯田市で進めておりますが、今こそ、この三遠南信地域全体の連携をさらに強化し、こうした将来に向けた新産業育成のためにもう一步踏み込んだ連携が必要なのではないかと感じております。これはどちらかといいますと、SENA への宿題ということで、私から最後に投げさせていただきます。

皆様からいただいた様々な意見を一つにまとめるには、やや乱暴ではあるかもしれませんが、本日のまとめをさせていただきたいと思っております。

まず、1番目が三遠南信地域に広がる多様な資源、あるいは、地域のすばらしさを生かした、地域ブランドを確立し、そして、PRしながら地域の連携をさらに強化することで、更なる産業発展が期待されるのではないかと、いう点です。

2番目が、三遠南信自動車道やリニア中央新幹線などの交通ネットワークを生かした戦略的な企業誘致、あるいは産業振興を進めるとともに、この三遠南信全域にまたがる広域

連携の強化によって、将来成長性のある未来産業への取り組みも必要ではないかということです。

そして、3番目が三遠南信地域の産業の発展を支えるための人材です本日は人材のお話が比較的少なかったのですが、やはり産、官、学、金の連携によって、産業競争力を支える人材の確保、あるいは育成、そして定着、誘導に取り組んでいく必要があるのではないかと思います。

皆様の御了承をいただいたということで、本日は大変限られた時間ではありましたが、皆様の御協力で円滑にしかも密度の濃い意見交換ができましたことを改めて御礼を申し上げます。

以上をもちまして、「技」分科会を閉じさせていただきます。

